

## 大空博教授と高橋正義教授のご定年にあたって

2003年3月末に大空博教授と高橋正義教授が定年を迎えられることになりました。本号はその記念のために刊行されるものであります。

大空先生は読売新聞社を退職され、1998年4月に立命館大学・国際関係学部へ赴任されました。先生は読売新聞社時代にはサイゴン特派員、パリ支局長、欧州総局長、外報部次長、編集局次長、論説委員等を歴任されたと伺っております。先生は、新聞記者の立場から歴史の大きな転換期に現場において「目撃者」になれたことを自負されています。ベトナム戦争の末期におけるアメリカのカンボジア進攻、北ベトナムの大攻勢、解放区潜入ルポ、また、ヨーロッパでのフランコの死とスペインの民主化、ベルリンゲル時代のイタリア（ユーロコミュニズム）、ミッテラン大統領の誕生等、さらにベルリンの壁崩壊後の東欧取材、第1回サミット（パリ・ランブイエ会議）の取材等を、先生はあげられています。先生は1997年に『特派員の目』（新潮社）という本を出版されていますが、この本はそれらの記録だと思います。新聞記者として充実した生活をされたものと存じます。

先生は新聞社を退職され、一時浪人時代を過ごされていましたが、立命館大学への採用が決まった直後に「生の風景」（『鷹』1998年4月）という短文を書かれています。そこには同じように記者であり北国の大学へ就職された友人の雪国での生活と絡ませて、また、新幹線の中からもみた富士山がこれまでと異なって見えるという文脈の中で、定年前に退職された動機、浪人時代の心境、新しい世界への旅立ちの決意が、そっと忍ばせるような表現で示されています。

国際関係学部での5年間において、先生は国際ジャーナリズム論を担当されながら、2000年度には国際言語文化研究所の専任研究員、2001年度には全学インターンシップ教育推進委員、2002年度には学部就職委員長等を歴任されてきました。とくに、就職委員長として先生は、学生の進路の開拓には技術的な手法・方策では無理であり、学生の職業意識を育てること、学部生の中堅層をどのように成長させるかという課題に教学改革と関連させて集中的に取り組む必要があることを提起されました。私たちは、この提起を受けて2004年をめぐりに学部・大学院の改革の作業に入っております。

大空先生はまたこの5年間に、ジャーナリスト志望の学生に対して、「書く」ことの大切さを強調され、文章指導を懇切丁寧になされました。この5年間にジャーナリストとして育て

いった学生のほとんどは先生の指導を受けております。

先生は新聞社から大学へ来られて、はじめのうちは環境の変化に慣れることを心がけられ、「教授会は欠席しない。飲み会に誘われたら断らない」を原則にされていた、と漏れ伺っています。とくに教授会には当初戸惑われたのではないのでしょうか。しかし、先生は今では教授会において積極的な発言を度々なされ、永らく教授会におられたような雰囲気をかもし出されております。

先生はこの3月末に定年を迎えられますが、引き続き特別任用教授として残られることになっています。健康に留意されて、今後ともジャーナリズムを目指す学生へのアドバイスをどうかよろしく願いいたします。私たちはご一緒に教育、大学の運営に当たっていただけることにこの上ない喜びを感じています。

高橋正義先生は石川島播磨重工業・海外協力部副部長から世界銀行へ転出され、さらに世銀から国際協力事業団（JICA）へ移られ、その間、ポーランド経済省大臣アドバイザー等を歴任後、1999年に立命館大学・国際関係学部へ赴任されました。先生はもともとエンジニアでおられましたが、石川島播磨重工業におられたとき、勤務先から国際開発学を学ぶように要請され、「国際開発センター」で1年間学ばれました。これがきっかけに国際協力の世界に入られたと聞いております。先生は石川島播磨の時代に、JICAとの協同で中小企業の開発研究、技術協力等の実践活動をはじめられましたが、これらが評価されて、後に工業スペシャリストとして世界銀行に採用されたのです。世銀ではラテン・アメリカ、アジアの開発金融プロジェクトに参画されたと、伺っています。

先生は90年にJICAに移られますが、世銀時代に企画されていたプロジェクトを世銀とJICAの協同でインドにおいて実践され、それが成功した後、今度はポーランド政府のアドバイザーとして市場経済移行国の産業戦略を中心とした仕事に約6年間携わられます。先生は99年に国際関係学部へ赴任され、学生への指導ととともに、夏の休暇などには引き続きJICAの指導員としてジョルダンに行かれるなど、これまで現役の「国際協力専門員」として活躍されています。

『国際開発ジャーナル』誌（2001年10月）に高橋先生の記事が掲載されており、4点のことが記されています。おそらく先生の国際協力についての基本的な姿勢が示されているものと思いい、紹介させていただきます。第1は、国際協力の分野では「普遍的専門性」と「個別専門性」の2つがあり、先生は後者から前者へ向かわれたこと、国際関係学部生は柔軟な考察力を武器に前者から後者に向かうことが現実的であろうとされています。第2には、日本の専門家（先生）がカウンターパート（生徒）を指導し、そのカウンターパートが他の被援助国へ派遣されていく、この図式が広がることが望ましい。第3に、国際協力で成功するに当たって最も

重要なことは、その国を好きになることであり、異文化を論ずるよりも「共生文化」を論じるほうがよい。第4に、国際協力の人材育成のためのシステムとフィールド拡大を図るには産・官・学・市民社会の新しい関係構築が必要である。

高橋先生は国際関係学部へ赴任されて、国際協力論、国際技術移転論などの講義を担当される一方、国際協力に関する学生の自主ゼミを支援するなど、国際協力に関心を持つ学生に大きな影響を与えてこられました。また、今年度は日本政府主催の「世界青年の船」の団長兼主任指導官として世界13カ国の青年に対して、国連、環境、平和などのテーマでセミナーを行なわれました。「世界青年の船」の経験は立命館の附属高校生に対しても話をされ、高校生からは大変な好評であったと聞いております。

高橋先生は今年度から立命館大学・国際地域研究所の所長を兼務され、来年度からは幸いにして特別任用教授として引き続き教育と大学の運営に当たられることになっております。健康に留意されて、今後とも、国際協力に志を持っている学生への励まし、また、われわれ教職員への有益なアドバイスをお願いいたします。

2003年3月

立命館大学  
国際関係学部長 奥田宏司

